

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA

COLLEGE REPORT

第8号

〈JUNE 1996〉

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP

「原罪」について 伊藤豊治

体育館の新築、図書館・校舎の増築へ向けて始動
やったぞ、少林寺拳法部!! / 敬和学園大学クリーン大作戦!!
ヴァンダウエルフ教授に名誉学位 / 後援会から



敬和学園大学では、1991年4月の開学式以来数度にわたり、入学式等で新発田メサイア合唱協会有志の方々にコーラスをお願いしてきました。その後の入学式及び卒業式に本学学生有志が加わるようになりましたが、写真の通り今年3月20日の第2回卒業式には本学合唱部だけで“Amazing Grace”を披露しました。4月5日の入学式では一段と素晴らしいコーラスを聞くことができました。団員がもっと多くなり、ますます上達することを祈ります。

新発田メサイア合唱協会の皆様のご奉仕に対し、厚く御礼申し上げます。

敬和学園大学 第2回卒業式



もくじ

「原罪」について……伊藤豊治……………	1	体育館の新築、図書館・校舎の増築へ向けて始動……………	8
ヴァンダウェルフ教授に名誉学位……………	4	敬和学園大学クリーン大作戦……………	10
やったぞ、少林寺拳法部……………	5	就職相談室から……………	11
新任教員紹介〈ジョイ・ウィリアムズ先生〉……………	6	1996年度 敬和学園大学公開講座……………	12
大学事務室と大学創設と……藤倉庄平……………	6	後援会から……………	13
学長室だより……………	7		

「原罪」について

英語英米文学科長・教授

伊藤 豊治



最近における一部女性の不倫願望の風潮に関連して、まず、人間の「原罪」について考えてみようと思います。

「原罪」とは、『旧約聖書』の創世記に語られているアダムとエバが神の命令に背いて知恵の木の実を食べたということです。

「原罪」などという考えは一般の日本人にはあまり馴染みのない言葉かも知れませんが、私たち欧米文学を研究している者にとっては、『旧約聖書』『新約聖書』は座右の書であり、その冒頭で語られているこの話は色々な点で重要な意味をもつのであり、私などは折りにふれ此の問題を考えてきたものです。それで是について書こうと思うのですが、その前に私の宗教的立場を明らかにしておいた方がよさそうです。

私の専門が英文学であることもあり、聖書はよく読みます。そして『新約聖書』のイエス・キリストの言動をつたえる福音書

にはいつも深い感動を覚えます。しかし私はキリスト者（クリスチャン）ではありません。キリスト者の前提は、天にいます父なる神、子なるイエス、そして聖霊の三位一体を信じること、殊に神の御子イエス・キリストが人間の罪を背負って十字架にかけられたと信じることであると思います。そこが私にはまだ及ばない所なのです。私は若いころルナンと云う人の『イエスの生涯』を読んで心を動かされたのを覚えています。ルナンという人は19世紀フランスの歴史家ですが、キリスト教の歴史を述べた大著のなかで当然ながらイエスを取りあげています。ルナンのイエスにかんする基本的な考えは次のようなものです。即ち、イエスは神の子・神ではない。しかし、ほとんど神といってもいいような崇高な人間である、ということなのです。だいが前に読んだので正確ではないかも知れませんが、その主旨は以上のようなものです。そして、イエスの生涯の言動をつぶさに検討し、彼がいかに超人的に崇高、偉大な人間であったかを例証しています。私はこの伝記に大いに共感しましたが、イエスについては、今でもその時と同じ気持ちをもって見ます。

私はこれから創世記の第三章、アダムとエバが蛇の誘惑に屈し、神の命令に背き、墮落する箇所を考えてみようと思いますが、この違反を後になって「原罪」と呼ぶようになりました。この章に先立って、神は楽園に住ませたアダムに命じ、園のすべての木の実を食べてもいいが、善悪を知る木の実を食べてはいけない、「食べると必ず死んでしまう」と言っています。第三章ではそれをうけ、次のように語られています。『主なる神の造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」。女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない。触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」。女を見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したの

CLOSE UP

で、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくこの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。その日、風の吹くころ主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れた』（1—8節）。長くなりませんが引用はこの辺でやめますが、アダムとエバが犯した人類最初の罪、「原罪」とはこのようなものです。そしてこの罪にたいし、人類は罰として死をあたえられます。

私がいつも躓くのは、「善悪を知る木の果実」を食べることがなぜ禁じられるのか、そもそも「善悪を知る木の果実」とはいったい何なのか、ということ。というのも、アダムとエバは神の命令に従うことは良いことで、それに背くのは悪いことである、ということを知るくらいは判断力があります。だからこそ蛇は、言葉巧みにエバを誘惑して、まず彼女を神に背かせ、次いでアダムを背かせなければならなかったのです。問題は、蛇も言うように、その実を食べれば「神のようになって善悪を知る」ということです。人間が神のような知恵をもつこと自体が悪いということでしょうか。それとも、その結果、現代の人間がそうであるように、神を無視するに至るということでしょうか。神自身は、違反にたいして三つの罰を宣告した上で、「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」という理由で、エデンの園から二人を追い出します。そこに私は矛盾を感じるので。もし彼らが知恵の木の実を食わなかったなら、

彼等は罰として死の宣告を受けないのですから、限りなく生き続ける筈です。従って「限りなく生きる」ことを神は否定しているわけではない。それでは神のように善悪を知ることが死に値する罪なのでしょう。或いは、神のように善悪を知りながら「限りなく生きる」ことは、あってはならないことなのでしょう。という風に考えてきますと、最初に言った、「善悪を知る木の果実」を食べることが何故禁じられるのか。そもそも知恵の木の実を食べるとは一体どういう意味をもつことなのか、といった疑問がでてくるのです。勿論、創世記冒頭の物語は、あくまでも神話ですから、その話に少々矛盾があるとしても、とやかく言うのは滑稽なことでしょう。ただ私がこの問題にこだわるのは、「知恵の木の果実」に関して私は私なりの考えがあるからなのです。

まず、この神話は私たちが住む現実の世界から逆に振り返って考えると良くわかります。私たちは、次のような疑問をもちます。なぜ人間は死ななければならず、そして生きている間も様々の苦しみに耐えなければならぬのか。なぜ神の創った人間が、現実の世界でしばしば見られるよう、限らない悲惨さにさらされなければならないのか。なぜルワンダやサラエボで起きているような残酷さが、神の創った世界で起こることが許されるのか、といったようなことです。この疑問は、まさにドストエフスキーが提出している問題です。ドストエフスキーという人は、ダーウインの『種の起源』などでキリスト教の信仰が揺さぶられた19世紀後半に、専ら神の探求にその作品のすべてを捧げた作家です。その最後の作品『カ

ラマーゾフの兄弟』のなかで、イワンという無神論者が同じ疑問を提出しています。即ち、誤って猟犬を傷つけた子供に激怒した領主が、猟犬の群れを放ってその子を追いかけて咬み殺させた例を引き合いにして、神の創造した世界で何故そのようなことが許されるのかと詰問しています。この疑問は、神が世界を創ったと考える時、だれでもが感ずるはずのもので。その疑問に創世記は明快に答えているのです。人間が神に背いたからであると。

現実の世界の正当化のための論理、それが原罪である。というようなことは、俗人なら誰でも考えそうなことなので、わざわざ述べるまでもないことのように。私が問題にしたい主要点は、「知恵の木の果実」です。これに就いて私は以前から一つの考えをもっており。即ち、「知恵の木の実を食べる」とは男女の交合を意味する、ということ。私たちの大学がキリスト教精神に基く学校ですから、それぞれ『新約聖書』『旧約聖書』を専門とする山田、永野といった研究者がおり、私は聖書に関するはいつもそういった先生に教示を頂いているのですが、この方たちは私の見解に必ずしも賛成ではありません。従って、私の考えは正統なものではないと承知のうえです。

創世記第4章の冒頭に、「さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産む」とあります。この場合の「知る」は、前後関係からして、当然男女の交わりを意味します。山田先生の教示では、ヘブライ語の「知る」には、そのような意味があるとのこと。日本でも「女を知る」

CLOSE UP

とか、「まだ男を知らない」などと言いますから、「知る」という言葉がそのような意味をもつことは古今東西を問わないのでしょう。「知る」は英語では“know”、“知恵”は“knowledge”となります。

“know”に上のような意味があるとすれば“tree of knowledge”にそうした意味を読み取ることは、そう無理なことではないと思えます。それに蛇がエバを誘惑するというのもたいへん象徴的ですが、なににもまして意味深いのは、神がエバにたいし、知恵の木の実を食べた罰として、「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む」と言っていることです。

出産の苦しみが大きいことに異議はありませんが、神が人間の不服従にたいして課した罰、即ち死、生存のための苦しみ（「お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。」）と並列して、特に懐妊、出産時の苦しみを与えていることは、まことに意味深長なことです。種族保存のための出産、個体存続のための食を得る労働、そして死といった人間にとって最も根本的な事柄の原因が、知恵の木の実を食べた結果であるとすれば、「知恵の木の実を食べる」ことの意味はおのずから決まってくるのではないのでしょうか。

以上の理由で、「知恵の木の実を食べる」ということは、男女の交わりを意味すると思うのですが、この考えはそれほど特別なものではなく、俗に「禁断の木の実を味わう」などと言う場合、暗々裏に意味さされていることであるように思えます。しか

し、そうした世俗的な考えは、かの偉大な作家ミルトンが『失楽園』のなかで述べている考えでもあるのです。英国の清教徒革命については聞いたこともあるでしょうが、フランス革命より150年も前に、国王チャールズ一世を断頭台に送り共和国を樹立した熱心な清教徒たちの革命です。そして、その革命評議会の秘書官として共和国の正義を世界に宣伝したのが敬虔にして熱烈な清教徒ミルトンです。『失楽園』は彼の晩年の傑作であり、創世記第1章から第3章、即ち、神による天地創造からアダムとエバの楽園追放にいたるまでの物語を題材にした叙事詩であります。

『失楽園』の第9巻で、悪魔の化身である蛇によってエバが誘惑され、禁断の木の実を食い、更にエバに勧められてアダムが食い、その結果二人に起こることが詳細に描かれています。まず蛇の姿の悪魔は、アダムと離れて一人楽園の花園で薔薇の手入れをするエバに近寄ります。そして、彼女の美しさを褒め讃えることにより彼女を誘惑しはじめます。次に、禁断の木の実（林檎の実）の素晴らしさを吹聴します。しかし彼女の理性は神の命令に逆らうことを拒否します。驚きを装った悪魔は巧みな詭弁を弄して、木の実を食っても決して死ぬことはない。それを食べると、目が開けて神のように善悪を知るにいたることを神はご存じなため、食うことを禁じているのであるということを経々な比喻を用いて巧妙に説きます。その説得力のある巧言に誘われて、エバはその果実をもぎ取って食べます。食べた彼女は、「今までにこれほど美味し

い果物を味わったことはない」と思い、やがて「酒にでも酔ったようにひどく上機嫌になり」、アダムのところに行って、彼にも林檎の実を食うようにすすめます。アダムはエバが悪魔に誑かされていることを知り、禁に背くことを充分知りながらも、「かねて持っていた己の善き知識に逆らってその果実を食べた——惑わかされたからでなく彼女の女としての魅力に愚かにも負けた」からである、とミルトンは述べています。やがて「二人は葡萄酒に酔った者の如く陽気になり……この偽りの果実は……二人の心に、燃えさかる肉欲を炊きつけた」のであります。「彼はエバに向かって淫らな視線をなげかけ、エバもまた同じように淫らな視線を彼になげかけて、それに応じた。二人は情欲に燃えた」。その後、二人は木陰の花さく褥の上で「愛と愛の戯れに心ゆくばかり耽ったが、これこそ、彼らが一体となって犯した咎の封印であり、罪の慰安であった。やがて肉の甘い戯れに疲れ果て、快い眠りに襲われた」と述べています。『失楽園』に示された見解は以上で充分と思えますので、これでやめます。ミルトンの宗教観は、人間の救済に関しあまりにも理性を力説する点で、必ずしも正統なものではないようではありますが、「知恵の木の実」についての考えは以上のように明快であります。

それでは、なぜ男女の交合といった人間の自然な行為を、「原罪」というような大きな罪と考えるのか。そして、それとの関連で、現代における男女の関係、不倫願望の風潮といったことに就いて述べる積りでしたが、紙面がありませんのでこの辺で終りにします。

ヴァンダウェルフ教授に名誉学位



3月20日に挙行された敬和学園大学卒業式において、同大学の姉妹校である米国アイオワ州オレンジ市のノー・スウェスタン大学教授ヴァンダウェルフ氏に名誉学位が授与された。

敬和学園大学の第2回卒業式は3月20日に聖籠町民会館で挙行された。卒業式においては昨年に引き続き、今回も名誉学位を贈呈したが、今年の榮譽を受けたのは、本学の姉妹大学である米国、アイオワ州オレンジ市のノー・スウェスタン大学 (Northwestern College) のライル・ヴァンダウェルフ (Lytle VanderWerff) 教授である。

同教授は本学が文部省から設置認可を受ける少し前に北垣学長予定者と東京で出会い、キリスト教主義教育の理想に関して意気投合した間柄である。(両者ともにスコットランドの大学で勉強したという共通の経験がその背景にあったといえるかもしれない) その結果1990年11月に北垣学長予定者はノー・スウェスタン大学を訪問して、敬和学園大学との間に「キリスト教主義教育におけるパートナーシップ」の盟約を結んだ。この結果、開学した1991年夏に7名の敬和の学生が学長の引率のもとにノー・スウェスタン大学の外国人学生のための夏期大学 (Summer Institute) に参加し、5週間

にわたって英語の集中訓練と新約聖書の入門講座を受け、単位を取得して無事帰学した。

ヴァンダウェルフ教授はこの夏期大学の立案者であり、推進者であり、毎年夏休み中の5週間にこのプログラムのために駆けつけた。英語の集中訓練にはタカロ教授があたる。数名のノー・スウェスタン大学の学生がその助手をつとめている。外国からの約30名の参加者の大多数は日本人である。参加学生は朝8時から夜8時までの12時間は英語だけを使うよう決められており、日本語はご法度である。ヴァンダウェルフ教授はヨハネ伝について講義する。英語の集中訓練の場合はもちろんのこと、ヨハネ伝でも毎回小テストがあり、学生たちは勉強に追いまくられる。これでは眠る時間が少ないと言って悲鳴をあげる学生も出るほどである。

しかし週末には決められた家庭でホームステイし、とくに土曜日にはヴァンダウェルフ教授自身がミニバスの運転手をつとめ、年に1度のアメリカ・インディアンのお祭りとか、農業見本市を見学させ、また近くの大シヨップ・ピング・モールにも連れていく。オレンジ市内にあるオランダ系移民の建てた教会、邸宅、工場、店などの見学にもヴァンダウェルフ教授が先頭に立って案内する。教授は50マイル、70マイルの道程をものもせず、また到着が深夜になることもいとわずに、ミニバスを運転して飛行場まで外国人学生を出迎え、そして見送る。(日本

では学生たちのために教授がミニバスの運転をするという話はまだ聞いたことがない) スクエア・ダンスのとき眼鏡を落としてレンズを割った学生がいた。彼に対して、ヴァンダウェルフ教授は自分の使っていた古い眼鏡を与えたとこ、それは偶然にも学生の眼にぴたりと合うものだった。学生が感動したことはいうまでもない。

昨年、敬和学園大学のある新発田市と、ノー・スウェスタン大学のあるアイオワ州オレンジ市とが姉妹都市関係を結んだ。アメリカ側でそのお膳立てをしたのは、ほかならぬヴァンダウェルフ教授であった。同教授は昨年6月にオレンジ市長をはじめとするオレンジ市側の代表団5名の案内役として来日し、その大役を果たした。本学は姉妹大学の一員の中にこのような献身的な友人を持つことを名誉であり、誇りであると考え、理事会と教授会の議をへて、この名誉文化博士号を贈呈することに決めたのである。

ヴァンダウェルフ教授はオランダ系移民の子孫として1934年サウスダコタ州に生まれた。本年61歳。ノー・スウェスタン大学がまだ短期大学であった時代に2年間学び、ミシガン州のホープ大学を優等で卒業した。聖書神学、宣教学、イスラム研究を専攻し、プリンストン神学校で修士号、エディンバラ大学で博士号を取得した。1967年以来母校ノー・スウェスタン大学(4年制大学に昇格していた)の教授として聖書学と宣教学を担当するかわら、1985年以降は同大学の国際教育プログラムの責任者として活躍してきた。恵泉学園大学で半年間教壇に立ったこともある。オレンジ市立図書館に勤務するフィリス夫人との間に1男2女がある。

“やっただぞ、

少林寺拳法部!!

敬和学園大学の少林寺拳法部は、11月に福岡で開催された少林寺拳法全国大会に出場した。惜しくも本選には残れなかったが、開学5年目にしての全国大会進出は快挙である。同部は続く新潟県大学生少林寺拳法大会で総合2位の好成績を収めた。

敬和学園大学には、大学が公認している19の運動部がある。その中でも比較的小さな少林寺拳法部では、昨年10月に長岡市立市民体育館で開催された第16回少林寺拳法新潟県大会兼1995年少林寺拳法全国大会新潟県予選会で団体演武一般団体の部に出場し、4人の部員が全国大会へ出場権を獲得した。山口正道（国際文化学科2年、2段）、後藤恵美子（英語英米文学科2年、2段）、堤 理貴（国際文化学科1年、3段）、吉岡舞子（英語英米文学科1年、2段）の4名である。当時その4名がすべて1年生と2年生であることも珍しい。敬和学園大学では全国大会に出場した部は、今までのところ少林寺拳法部だけである。

九州への遠征に先立ち、4人の部員は北垣学長に案内されて、新発田市役所に近寅

彦市長を表敬訪問し、同市長をはじめ市議会の星野幸雄・社会文教常任委員長らから暖かい激励を受けた。

11月3日、福岡ドームで開催された1995年少林寺拳法全国大会では、惜しくも本選に残ることができなかったが、少林寺拳法部が開学5年目にして全国大会に出場したことは快挙と言っていだろう。

さらに11月19日、新潟県鳥屋野総合体育館で開催された第4回新潟県大学生少林寺拳法大会では、全国大会の結果を雪辱するかのように、4人の部員は総合2位、団体演武有段の部で2位の好成績を収めた。ことに、1日にして敬和学園大学に13個のメダルや盾をもたらしたことは特筆に値する。同大会での成績は以下の通りであった。

・自由組演武

（男子2段以上の部）

第1位 堤 理貴・山口正道

（女子有段の部）

第1位 後藤恵美子・吉岡舞子

第3位 泉田妙子・後藤恵美子

（男子初段の部）

第6位 山口 崇・玉木竜介

・段外規定組演武

（男子の部）

第4位 小平雅人・田辺克典

・規定単独演武

（男子2段以上の部）

第2位 山口正道

第3位 堤 理貴

（男子初段の部）

第2位 山口 崇

第3位 玉木竜介

（女子有段の部）

第1位 後藤恵美子

第4位 吉岡舞子

財団法人少林寺拳法連盟は、近く50周年を迎える。「未来への挑戦―躍動、交流、創造」をモットーに、少林寺拳法の修行を通じた「人づくり」の実践をめざすという。敬和学園大学の選手たちの折り目正しい、きびきびした態度と言葉遣いからも、彼らが競技や演武だけでなく、精神的にも立派に鍛えられた若者たちであることがうかがえる。

キヤロリン・ ジョイ・ ウイリアムズ



私が初めて日本に来たのは、生後6カ月の時でしたが、子供の頃はほとんど日本で過ごしました。若い頃はよく日本にもアメリカにも帰属していないように感じました。日本では私はいつだって「ガイジン」ではありませんが、日本は私の故郷でした。アメリカは私の母国ですが、私はいつも自分がよそ者、「ガイジン」(一)であるように感じていました。でも今は「家」と呼べる国が二つあることを幸運に思います。

私の両親は宣教師で英語を教えてくださいました。ですから若い頃は英語教師にはならないと誓っていました。ところが、どういう理由か、私は大学で英米文学を専攻し、大学院では TESOL (TEACHING ENGLISH TO SPEAKERS OF OTHER LANGUAGES) を専攻しました。おそらく英語の先生になることで日本で働けるということを経験的に知っていたのだと思います。

12年程私は日本の大学で、英会話的な授業を担当してきました。今年敬和で、ただの会話にとどまらないクラス——聴く/話

すⅡ、読むⅠ・Ⅱ、書くⅢ——を持てることを嬉しく思っています。このようなクラスを通して、学生の皆さんが英語の実践的なコミュニケーションの運用能力を養うだけでなく、その運用能力を様々な学問領域を探索するために使えるようになって欲しいと思います。しばしば当惑を覚えることですが、日本の大学では実践的な言語の運用能力が、文学、言語学、経済学、歴史といった他の学問的研究から切り離して考えられているようです。私はこのような研究の領域は相互に関係してくるものだと信じています。実践的な英語の運用能力を備えた学生なら、その運用能力をコミュニケーションだけにではなく、広い範囲の研究領域にも使えるはずだと思います。

外国語学習のもう一つの重要な意味は、自分の母国語と文化をより深く理解するようになることです。学生の皆さんが英語を通して、以前は気がつかなかった日本文化と社会を理解するようになることを願っています。日本は多くの面で「国際的な超強大国」となりましたが、未だに誤解されています。日本の若者達は外国の人々に、最初「現代的」アジアの国、日本を紹介する重要な役割を担うことができます。そのためには、国際語である英語をマスターし、自分の国を客観的な視点から理解できるようにならなければならないと思います。

(本学専任講師に本年四月一日就任)

大学事務室と 大学創設と

藤倉庄平



敬和学園大学へ来て五月末日で十ヶ月になる。初めて来た時は、丁度夏休み中だったので、静かな事務室は時折り事務機器の音や、電話の話し声をする程度で、職員は只管黙々と仕事をしていた。前の職場の騒々しさとは全く違った雰囲気である。暑い夏が終り、大学前の田圃の稲が刈り取られ、後期の授業が始まると大学の様子はすっかり変った。朝九時近くになると学生は思い思いに、ある者は徒歩で、バスで、そして自家用車でそれぞれ通学してくる。学内の学生駐車場はみるみるうちに一杯になる。チャイムの音と共に静まりかえる。昼になるとオレンジホール、同アネックスは学生で混雑する。売店前も。晴れた日には栄光館前広場で、円陣をつくって食事している風景も見られる。一方事務室の窓口には、学生証明や、就職用務等手続きに訪れる者も居て職員が応対にいとまがない。これが間断なく夕方まで続く。室内では先生方との事務連絡も結構ある。こうして静かだった事務室も賑やかな職場に変わる。これがほとんど毎日である。こうした中にも、入試の準備や、就職相談・指導、大学内外の総括事務、予算の執行等着実に進行してゆくのである。

本学はまた他にみられないボランティア

学長室 だより

敬和学園大学の第二回卒業式は三月二十日に聖籠町市民会館で挙行され、二百二十名の第二期生が巣立っていきました。昨年三月に卒業した第一期生は二百二十七名で、九月に三名が卒業しましたから、これで本学の卒業生総数は四百五十名となります。

彼らはいまや新潟市や新発田市とその周辺の第一線で活躍しています。本学の裾野が確実に広がりつつあることを感じます。

本学の第六回入学式は四月五日に新発田市民文化会館で挙行し、潑刺とした新入生二百五十六名を迎えました。式後、おなじ会場で大学後援会総会が開かれ、後援会の顧問である後宮俊夫敬和学園理事長と私が挨拶しました。

四月六日には午前には新入生のための外国語ガイダンスを行いました。本学では基本理念の一つである国際主義

う、カリキュラムの改革をはかりました。そのためレベルも三段階に分け、レベルⅠを必修とし、レベルⅡ、Ⅲは、やる気のある学生がさらに力をのばすことができるような構成になっています。昨年からは必修は一つの外国語のみとしましたが、多数の学生が第二外国語にも挑戦しています。新潟県下の大学で英語教育にもっとも工夫をこらしたカリキュラムを実践しているのは、隣の南イリノイ大学新潟校を除けば、敬和学園大学であるといえます。

その日の午後には、ふたたび新発田市民文化会館を会場として、国際基督教大学前学長の大口邦雄博士を講師にお招きして、新入生歓迎公開学術講演会を開きました。「あなたにとって大学とは何か」という演題のもとに、先生は約八十分にとわり、ヨーロッパにおいて大学の理念がどのように発展してきたかを描いてみせ、二十一世紀をめざす日本の大学が継承し発展させなくてはならないリベラル・アーツ教育の重要性を強調されました。聴衆の中には市民の姿も多数見られ、講演後の質問にも堂々としても適切に答えられた大口先生に感銘を受けました。

四月十一日、木曜日から講義が始まり、キャンパスは学年初め特有の活気にあふれています。私も英語英米文学科の「文化・文学比較論」という科目を担当しており、木曜日の朝九時から講義を始めました。四月二十五日、二十六日の両日にわたる胎内パークホテルでの新入生オリエンテーションも無事に終わり、一九九六年度がこうして動き始めたことを実感しています。

敬和学園大学の第二回卒業式は三月二十日に聖籠町市民会館で挙行され、二百二十名の第二期生が巣立っていきました。昨年三月に卒業した第一期生は二百二十七名で、九月に三名が卒業しましたから、これで本学の卒業生総数は四百五十名となります。

活動を行っている。これは特筆すべきことである。夏休みの終りに一年生は皆各施設のボランティアに参加する。そして一日、施設の人達を招んで招待事業もおこなっている。

今から十二・三年前になるのか『新発田市に四年制大学を』と、市長を中心に運動をはじめた。君元新潟県知事の指導と、地元代議士の協力をいただきながら進められ、複数の大学が候補に上り、私も当時関わっていたので随分走りまわった。

活力ある町づくりを進めるため、「大学を誘致して若者の定着を図る、教育文化の向上、そして進学率を高める」のねらいがあった。又これに伴いカルチャーセンターや、文化会館、五十公野地区の体育施設等の環境整備も急がれた。これらは概ね昭和六十年代に整備された。

大学キャンパスを五十公野山に、という意見も出て現地調査もおこなった。山はほとんどが市の財産で標高七十m余りの低い松山である。大学誘致は、当時各都市が活性化対策として大きな目玉にしていたものである。

結局新発田市が誘致した大学は、「敬和学園大学」に決定した。当初の施設費は大幅に膨れ上り、新潟県の外、聖籠町の協力も仰ぐことになった。

大学誘致は関係者苦勞の末成功した。今、一〇〇〇名の学生が静かな学舎で勉学に励んでいる。これからの大学運営はますます多難の時代を迎えるが、施設・設備を改善整備し、内容の充実によって敬和学園大学が阿賀北唯一の大学として一層発展することを願っている。

(北垣宗治)

(大学事務局長)



「話す」の四技能を磨くよ

体育館の新築、図書館・校舎の増築へ向けて始動

敬和学園大学に体育館はあるか、ないか。案内人がつかないで校舎見学をした人は、ないと答えるだろう。一方、大学関係者や在学生はあると答える。

この説明は、大学設立申請時まで遡る。大学設立準備室が開設されたのは1987年6月。その直後から文部省への申請事務が開始された。当時大学設置基準では、体育館について、「なるべく備えるもの」とされていた。そこで資金に限りがあった学校法人敬和学園は、体育館はない事として折衝を続けていた。従って、1988年7月の一次申請には、体育館もまたその建設計画もないままの申請となった。

しかし、読者で記憶の方もおられると思うが、申請時の創立費の算出方法等で誤りがある旨文部省から指摘があり、同年の11月、申請の取り下げを余儀なくされた。その後、設立計画を根本から見直し、その都度文部省との折衝を行ったが、その際も体育館はないままの計画だった。

しかし、1989年7月の再度の一次申

請の間近になって、新潟の立地条件をふまえると、体育館は必要である旨の指摘を受けた。これは、その後1991年6月の「大学設置基準の一部を改定する省令」（いわゆる大学設置基準の大綱化）の中で、体育館について「原則として備えるもの」に変更になるその動きが既にあったものと思われる。

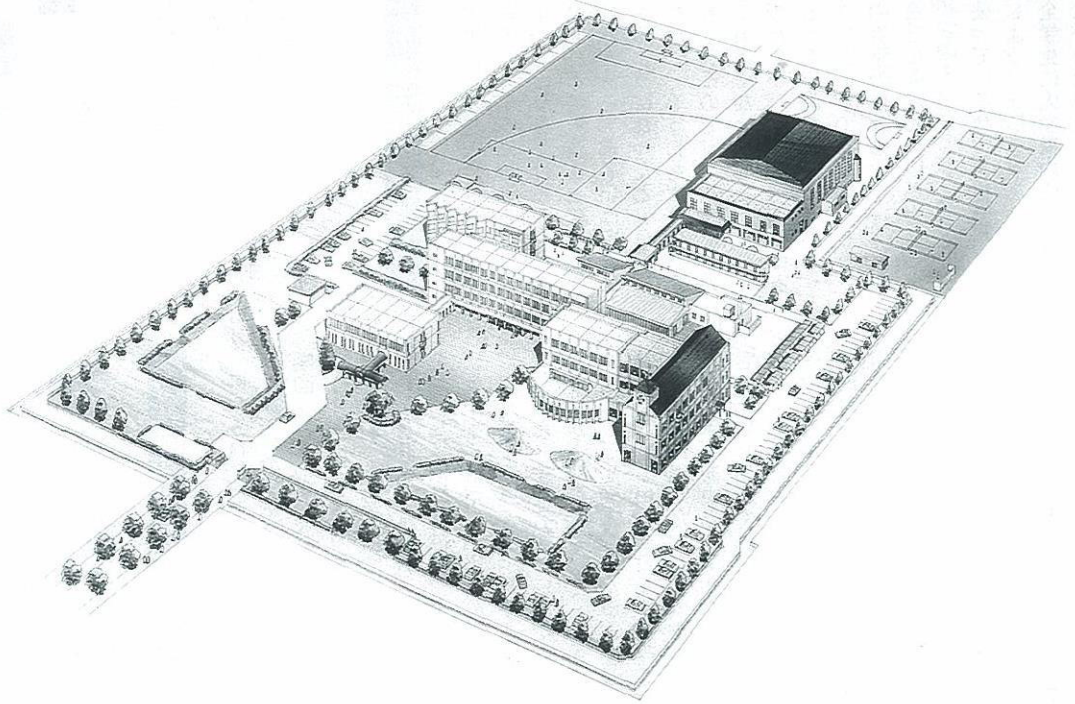
しかし、学校法人としては、既に大学の設立のための財源については確定しており、俄に、また短期間に体育館建設のための資金を捻出することは、不可能であった。

そこで、この大学を当初から積極的に誘致いただき、既に1億5千万円の補助金を議決いただいた新潟田市にご援助をお願いしたところ、旧新潟田市立第一中学校の新築移転にともない不要となった同中学校の体育館（新潟田市大栄町）を1991年3月15日から、2006年3月14日までの期間、「土地を無償貸付し、建物は無償譲渡する」ことを1989年7月25日の市議会で議決いただいた。

その後、シャワー室及び更衣室を設備する等若干の改修工事をし、現在体育実技（本年度からの科目名はスポーツ実習）には本学と体育館との間に学バスを運行し、学生の送迎を行っているわけである。

しかし、大学から体育館までは片道約15分を要するため、90分授業ではあるが、実質60分程度しか授業時間が取れないことで、担当教員には多大なご苦労をおかけしてきた。また、スポーツ実習が開講される週三日は、JR佐々木駅・大学間のシャトルバスと併せて学バスの運転要員を2名確保しなければならず、大型免許を取得している事務職員が交替で学バスを運転することを余儀なくされてきた。

これらの問題とは別に、建物が離れていることで、充分な管理が行き届かない面があり、以前は夜間に侵入者があったり、ガラスの破損が著しくなる等の問題が生じたため、1992年6月から警備会社に委託して管理を行ってきたが、それでも近隣の住民の方々には多大なご迷惑をおかけし



てきた。

さて、前置きが長くなったが、文部省に提出した申請書の事業計画の中で、「体育館建設計画は、平成8年度着工、平成9年度完成としている」旨明記しており、開学した1991年度から基本金組入れ（将来計画のための積立金）を行っており、1995年度が終了した時点で、基本金はちょうど1億円に達した。

そこで、学校法人敬和学園の理事会は、体育館の建設と併せ、既に満パイとなっている図書館及び教室（同一の建物）の増築を1996年度着工、体育館は1997年秋、教室は1998年3月の竣工を目指し、現在基本計画を検討している段階である。幸いこの4月から、学内では将来構想検討委員会が組織され、体育実技を担当する久島教授の意見や、図書館委員会及び教務委員会にて検討された面積や教室の数を財務計画と照らし合わせながら検討している。しかし大学では、将来構想の中で、社会福祉関係の学部又は学科の増設や、チャペル建設等、大きな構想もあり、委員会ではそれらを含め財務計画の熱心な検討が展開されている。

まだ正確な設計段階には至っていないが、完成図をご覧いただき、皆様の温かいご支援と折りを願います。次第である。

（総務課長 長澤）

敬和学園大学

クリーン大作戦!!

学生たちが自身が企画をし、大学構内の一斉掃除を行った。このクリーン大作戦には思いがけず多数の学生がボランティアで参加し、文字どおり「クリーン・ヒット」の企画となった。

★学生が呼びかけた清掃作業

高校生が大学生になったときに今までの学校生活と異なるシステムに遭遇し、ある種のカルチャーショックを受ける。たとえば時間割を自分で作る。授業ごとに教室を移動する。コンパがある。あるいは講義の「代返」ができるようになったという学生もいるかもしれない。そうした大いなる変化の陰にかくれているので、「教室などの掃除をしなくてもよくなった」ということには意外と気づかない。学校の掃除はほとんどの生徒にとって正直なところ、あまり好きにはなれないというのが本音だろう。通常、大学の教室の掃除はオフィスビル等と同様清掃会社に委託しているところが大多数で、敬和学園大学でもそうなのだが、時にはいつも使っている教室を自分たちの手できれいにしよう、という有志の声が発信源となり、全学生に大学構内の清掃作業を呼びかけることとなった。

★参加者は100人以上

呼びかけたのは本学の「ボランティア・サークル」の学生。この清掃作業は「敬和学園クリーン大作戦 (Let's clean up our campus.)」と銘打たれ、昨年の前期末試験が終わった翌日、つまり夏休み初日にあたる7月19日(水曜日)を実行日として、キャンパス内に宣伝用のポスターが貼られ、ビラが配られた。「当日の飛び入りは歓迎です。ぜひ友達を誘って下さい!」とビラは訴えた。主催者側はいったい何人集まるだろうかと心配していた。30人という者もあれば、いや50人ほかたいと主張する者もあった。さていざ当日が来てみると、そんな心配はあとかたもなく吹き飛んでしまった。1年生を中心に100人以上の学生が参加を申し出てくれたのだ。主催者の学生は、今度はうれしい悲鳴を上げながら、「「この人たちは3階を」「あなたたちは外回りをお願い」などと、急遽場所と人数の割り当て作業に追われることとなった。おもな作業は机の落書き消し、「ごみ拾い、机・椅子の整頓、黒板の清掃だった。約1時間で窓ガラスを拭いた学生もいた。約1時間半で、どの教室も見違えるほどきれいになった。机の表面の鉛筆による落書きはすべて消され、教室の床も清掃された。外

回り組は草の中に落ちていた空き缶、トイレの上に散らばっているタバコの吸殻を拾って回った。

★ボランティアでやることの意義

もしこれを大学当局が呼びかけたとしたらどうであつたらうか。おそらくあれほどの人数が集まらなかつたのではないか。多少は効率が悪く不器用なところがあつたとしても、学生がリードすることがいかに大切であるかがわかつた。それと同時に、自分の大学を愛する気持ちもまた、これを通じて養われていくのではないか。

大学生が教室を掃除するという話を聞いたことがない。先生がたに聞いてみても、国内海外を含めて、大学時代に自分の教室を掃除した覚えのある人はいないという。とすれば、これは大げさに言えば、大学の歴史に残る快挙かもしれない。確かに掃除をするということ自体はシンプルで特別なことでもないが、一般の大学ではこうした発想さえ出てこないのではないか。またやろうとしたところで、意外と難しいことであるに違いない。敬和学園が「ボランティアする大学」であるからこそ、これが可能になったと考えたいが、本当のチャレンジはこれからである。このみごとな「クリーン・ヒット」となったイベントを今後も続けられるかどうかは、学生自身にかかっているとと言えるだろう。

就職相談室から

ここ数年「氷河期」とか「超氷河期」といった社会語を生み出したほどの厳しい就職戦線が続いております。昨年度も伝統校でさえ大変な就職難の中において、新設校である本学学生諸君の就職活動は想像以上に厳しいものでした。しかし

「大学は勉学の場合」と同時に学生諸君が社会へ船出する為の最終仕上げの場であり、就職先の確保と就職指導もまた大切な課題である」との考えから、全学挙げて就職指導に取り組んだ結果、十分とは云えないまでも新設校としては、まずまずの成果を挙げることが出来たのではないかと思います。

今年度の就職戦線もゴールデンウィークには早くも中盤戦を迎え、学生諸君は企業ガイダンスに、会社訪問にと多忙な毎日を送っています。この本格的な就職活動期に備え、就職相談室では昨年から就職委員会と連携を取りながら数次に亘る就職ガイダンスや就職適性検査、女子身だしなみ講座、模擬面接、就職内定者との懇談会など各種イベントを開催する一方、企業の人事担当者との就職懇談会の開催や就職委員の先生方と一緒に就職先開拓の為の企業訪問を、また企業研究の為の各種資料の充実や実務的実務指導など学生諸君の就職活動が

少しでもスムーズに行なえるよう側面からの支援を行なって参りました。更に本年度からは企業の皆様から学内で学生諸君に対して就職情報を提供する場として教室を開き「企業セミナー」や「OBとの懇談会」等を開催していただく計画で現在着々と準備を進めております。

就職活動で「こうすれば絶対に成功する」といったものはなく、基本マナーを一つ一つ積み上げて行くしかありません。就職活動は選択と決断の連続です。しかし学生諸君を見ていると、いつも誰かのアドバイスを期待し、誰かから決断を下してもらおうのを待っている所謂「指示待ち人間」が多いように思われます。もっと自主的、主体的、積極的に行動してほしいものです。

また就職活動についてよく話題になるのが「就社か就職か」ということです。厳しい社会環境の中で企業は生き残りをかけて体質の強化を図っています。その為以前のバブル期のような「量」の拡大から、現在は「質」の良い学生の少数採用へと大きく方向転換をしています。ところが学生諸君にはそういった社会情勢の変化や厳しさといったものがあまり理解されていないように、未だ一部には「ブランド志向」(有名企業、人気企業)に憧れを求める傾向があります。「入りたい企業(就社)ではなく、自分が本当に「やりたい仕事」(就職)をしっかりと認識した上で就職先を選択してほしいものです。世の中に企業は星の数ほどありますが、一般に知られている所謂有名企業はほんの一握りにしかすぎません。有名ではないがその業界では優良企業とし

て評価されている企業は沢山あります。新潟県内には大企業と云われる会社はそれほど多くはなく大半が中小企業です。地元中小企業には優良企業は沢山あります。そしてこれ等の企業からの求人も数多く来ているので、従って求人倍率では十分なのですが問題は学生諸君の希望とのマッチングです。夢を追うばかりではなく現実的な就職活動が望まれます。

昨年十一月に開催した企業の人事担当者との就職懇談会の際実施した「学生の採用に関するアンケート」で各企業が求める人材についてお伺いしたところ、資質としては「起業家精神旺盛で積極的な人物」を求めています。具体的なタイプとしては「言葉使いがよく、さわやか」そして「スポーツマンタイプ」が好まれるということでした。又このアンケートの中の「学生時代にやっておくべきこと」については「友人を沢山作れ」「読書、勉強にはげめ」「スポーツにはげめ」というアドバイスが頂戴いただきました。このアンケートにお答えいただいたのは全て本学に求人しておられる企業の皆様です。就職相談室としても、これら企業のニーズにお応え出来るよう学生諸君を指導して参りたいと考えております。

就職は学生一人一人の周到な準備と、これをサポートする大学の就職指導が一体となつてはじめて成し得るものと思えます。厳しい就職戦線にあって一人でも多くの学生が、より満足度の高い就職が出来るよう就職相談室も全力投球して参りますので皆様方の倍旧のご支援、ご協力をお願いいたします。

(石田)

1996年度 敬和学園大学公開講座

〈メインテーマ〉「いま、教育を考える」

〈日程〉5月16日～6月20日 毎週木曜日 全6回

〈場所〉聖籠町公民館

回	開催日	講 師	テ ー マ
1	5月16日	敬和学園大学長 北垣 宗治	「PTAの体験から」
2	5月23日	敬和学園高等学校校長 角田 三郎	「共に育つ—— 親と子・教師と生徒」
3	5月30日	敬和学園大学教授 山田 耕太	「高等教育の明日」
4	6月6日	敬和学園大学助教授 ジェイムス・ブラウン	「未来に向けての 英語教育」
5	6月13日	敬和学園高等学校長 榎本 栄次	「自己形成」
6	6月20日	敬和学園大学教授 柴沼 晶子	「新しい学力観と評価」

〈メインテーマ〉「日本の近代史・現代史を考える」

〈日程〉9月13日～11月1日 毎週金曜日 全8回

〈場所〉新発田市生涯学習推進センター

回	開催日	講 師	テ ー マ
1	9月13日	敬和学園大学長 北垣 宗治	序論：近代国家としての出発 ——岩倉使節団をめぐる
2	9月20日	敬和学園大学助教授 永野 茂洋	日本の近代化とキリスト教
3	9月27日	敬和学園大学教授 田原 嗣郎	日本の公私
4	10月4日	敬和学園大学教授 塩屋 保	近代国家と戦争
5	10月11日	敬和学園大学教授 片桐 邦郎	二つの大戦と世紀末
6	10月18日	敬和学園高等学校校長 角田 三郎	神社神道がはたしてきた 役割
7	10月25日	敬和学園大学助教授 斎藤 祐介	戦後日本政治の軌跡
8	11月1日	敬和学園大学助教授 西沢 昭夫	戦後日本経済の復興と 21世紀展望

〈メインテーマ〉「外国文学散歩」

〈日程〉7月2日～8月6日 毎週火曜日 全6回

〈場所〉笹神村ふれあい会館

回	開催日	講 師	テ ー マ
1	7月2日	敬和学園大学助教授 桑原ヒサ子	『グリム童話』より 「青髭」を読む
2	7月9日	敬和学園大学教授 アラン・ブロンデ	『ハムレット』の意味と 死の意味
3	7月16日	敬和学園大学教授 松崎 洋子	究極のロマン—— スコット・フィッツジェラルドの 『グレートギャツビー』より
4	7月23日	敬和学園大学教授 片桐 邦郎	カミュの『異邦人』 (エトランジェ)
5	7月30日	敬和学園大学教授 伊藤 豊治	ゴールディングの『通過 儀礼』：原罪について
6	8月6日	敬和学園大学長 北垣 宗治	テスの生き方——ハーディーの 『ダーバヴィル家のテス』

〈メインテーマ〉「歴史／文学散歩」

〈日程〉9月24日～10月29日 毎週火曜日 全6回

〈場所〉村上市中央公民館

回	開催日	講 師	テ ー マ
1	9月24日	敬和学園大学長 山田 耕太	聖書を文学として読む (福音書の場合)
2	10月1日	敬和学園大学講師 金山 愛子	ギリシャ悲劇
3	10月8日	敬和学園大学教授 北垣 宗治	文学と歴史—1つの序論
4	10月15日	敬和学園大学助教授 佐藤 渉	マラルメとヴァレリーの 師弟関係／フランス文学
5	10月22日	敬和学園大学助教授 岩倉 依子	ドイツの宗教改革と木版画
6	10月29日	新潟大学教授 関尾 史郎	ヨーロッパ人のアジア認識

後援会から

敬和学園大学後援会構想が持ち上がったのは、開学前の最初の推薦入試合格発表後とお聞きしております。保護者の大学に寄せる期待の大きさを痛感し、後援会の基礎をゼロからお創りいただいた関係各位の熱意に対し、心から敬意を表したいと思えます。

私も第3代目の会長として、微力ではありますが、前任の方々の築き上げたこの後援会がより一層発展できるように役員はじめ関係各位のご協力を賜わりながら努力してまいります。

一年間休刊していた「カレッジ・レポート」が発行されたことは、本当に良かった

と思います。この機関誌は、保護者が大学の様子を知る上で貴重であることはもちろん、大学を創設される際に協力いただいた全国の方々にもお配りしているとお聞きし、費用は後援会でご負担させていただいております。

より一層充実した機関誌となるようお祈りいたします。

去る4月5日の入学式後に開催された後援会総会において、新役員、1995年度決算及び1996年度予算が承認されましたので、お知らせいたします。

1996年度は、大学で体育館の新築や校舎の増築等大きな事業を計画しているとお聞きしております。会員各位の一層のご協力をお願いいたします。

敬和学園大学後援会

会長 岩村 忠衛

1996年度 敬和学園大学後援会役員

職名	氏名	住所	TEL	職業
会長	岩村 忠衛	〒957 新発田市吉住町2-6-23	(0254) 2212269	(株)岩村養鶏 代表取締役
副会長	橋本代野子	〒959-123 豊浦町月岡453	(0254) 3212074	ホテル泉慶 取締役
副会長	二宮 守	〒959-121 水原町大字水原943-1	(0250) 6213668	(株)ニノルック 代表取締役
理事	廣神 洋子	〒957 新発田市大手町3-1-17	(0254) 2611586	新発田市役所 政策室長
理事	菅原 正廣	〒957 新発田市大字下内竹	(0254) 2217301	新発田市役所 政策室長
理事	中山いつ子	〒957 新発田市小舟町3丁目2-29	(0254) 2611071	新発田市役所 下水道課長補佐
監事	齋藤 康次	〒957 新発田市豊町2丁目8-13	(0254) 2313298	新発田市役所 下水道課長補佐
監事	菅原 晃	〒957 新発田市大手町1丁目2-16	(0254) 2212969	菅原呉服 店主

《顧問》 後宮 俊夫 敬和学園理事長
 北垣 宗治 敬和学園大学長
 藤倉 庄平 敬和学園大学事務局長
 (書記) 長澤 雄介 敬和学園大学総務課長

1995年度敬和学園大学後援会決算報告書 (単位：円)

収入の部			支出の部		
科目	予算	決算	科目	予算	決算
前年度より繰越	22,113,631	22,113,631	会議費	5,000,000	2,549,376
会費	40,000,000	38,638,150 (新1年生 8,150,000含む)	事務費	1,000,000	520,361
預金利子	200,000	253,095	通信費	1,300,000	280,421
雑収入	100,000	0	印刷費	2,500,000	1,566,500
			学生クラブ補助	5,000,000	4,092,000
			教職員研究活動補助	1,000,000	0
			施設補助	30,000,000	29,656,820
			旅費交通費	500,000	6,265
			雑費	500,000	33,974
			計	46,800,000	38,705,717
			次年度繰越	15,613,631	22,299,159
合計	62,413,631	61,004,876	合計	62,413,631	61,004,876

敬和学園大学後援会予算(1996年4月1日～1997年3月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
後援会費 800人×5万円	40,000,000	会議費	5,000,000
預金利子	200,000	事務費	1,000,000
前年度より繰越金	22,299,159	通信費	1,300,000
		印刷費	2,500,000
		学生クラブ補助	5,000,000
		教職員研究活動補助	1,000,000
		施設補助	30,000,000
		旅費交通費	500,000
		雑費	500,000
		計	46,800,000
		次年度繰越	15,699,159
合計	62,499,159	合計	62,499,159

1995年 9月

- 2日 ウーマンカレッジ「現代お墓事情」
立教女子短期大学 井上治代講師
- 8・9日 日本ホワイトヘッド・プロセス学会
第17回全国大会開催（9日は本学会場）
- 9日 ウーマンカレッジ「家族・女性の社会活動・社会参加
—韓国・フランスの場合—」
車熊淑宣教師 マルチーヌ 凌元非常勤講師
- 13日 敬和学園大学後援会役員会
- 18日 教授会
- 19日 大学等連携講座初日 村上市
「文学散歩」日本文学を通してみた日本人の心
「夏目漱石『こころ』と福音書の接点」延原時行教授
- 19～22日 福祉体験学習
- 21日 公開講座初日「戦後50年を考える」「戦後日本のイメ
ジの変遷」北垣宗治学長
- 22日 敬和ふれあい
バラエティー



9/22
敬和ふれあい
バラエティー▶

- 28日 公開講座「戦後50年と大学改革」山田耕太教授
- 30日 9月卒業式 3名
- 30日 ウーマンカレッジ「家庭が仕事か？」
—ドイツ・アメリカにおける女性の事情—
新潟大学 マーガレット 金子講師
ジョイ・ウィリアムズ非常勤講師

10月

- 3日 大学等連携講座「坂口安吾の『墮落論』と『白痴』の間」
文芸評論家 若月忠信先生
- 5日 公開講座「近代100年のアジアにおける日本の影響」
新潟国際情報大学 區建英助教授
- 教授会
- 12日 公開講座「戦後50年を文学で読む」
文芸評論家 若月忠信先生
- 大学等連携講座「この短歌の世界」
サンフォード・ゴルドスティン教授
- 14日 ウーマンカレッジ
「東南アジアの女性—光と影」西澤昭夫助教授
- 17日 大学等連携講座
「会津八郎の世界『山鳩』英訳をめぐる」北嶋教授
- 19日 公開講座「元海軍士官の戦後50年」
—国際平和の視点から—後宮俊夫理事長
- 20日 理事会
- 21・22日 敬和祭



10/21・22
敬和祭▶

キャンパス日誌

- 24日 大学等連携講座「芥川龍之介とキリスト教」
新潟大学 先田進助教授
- 26日 公開講座「敗戦国ドイツの場合」桑原ヒサ子助教授
- 28日 ウーマンカレッジ「第4回世界女性会議(北京大会)に参
加して」にいがた女性会議代表 吉村洋子氏 他
- 30日 大学等連携講座「森鷗外と遠藤周作の留学」北垣宗治学長

11月

- 1日 教授会
- 2日 公開講座「戦争体験と戦後体験—その中で歴史を考える」
敬和学園高等学校 角田三郎養長
- 9日 公開講座「日比関係の50年」浅野幸穂教授
- 10日 リトルルト サンワーク新発田
- 11日 ウーマンカレッジ
「グリム童話に描かれた女性」桑原ヒサ子助教授
- 18・19日 一般教育学会課題研究集会
- 23日 推薦・編入学入試
- 28日 就職懇談会
ホテル新潟
- 29日 教授会



▲11/28 就職懇談会

12月

- 4日 第2回阪神淡路大震災チャリティーバザー
- 13日 教授会
- 15日 クリスマス行事
- 16日 大学・高等学校合同クリスマス
- 18日 敬和学園大学後援会役員会

1996年

1月

- 10日 教授会
- 13・14日 大学入試センター試験
- 20日 外国人留学生入試
- 24日～2月8日 学年末試験

2月

- 1日 一般入試前期日程
- 5日 教授会

3月

- 1日 教授会
- 4日 オレンジ会役員会
- 5日 敬和学園大学後援会役員会
- 13日 一般入試後期日程
- 15日 教授会
ノースウェスタン大学 ヴァンダウエルフ教授 来新
- 20日 第2回卒業式 220名卒業
- 25日 理事会・評議員会



▲4/25・26
オリエンテーション

4月

- 5日 入学式
- 6日 新入生歓迎公開学術講演会「大学とは何か」
講師 国際基督教大学前学長 大口邦雄先生
- 17日 教授会
- 25・26日 オリエンテーション
- 26日 敬和学園大学後援会役員会